

● ジョルジュ・アペルギス (1945~)
**2人の打楽器奏者／役者のための
『再会』** (2013)

→「室内楽ポートレート(室内楽作品集)」のプログラム・ノート参照

● ジョルジュ・アペルギス
**1人の声のための
『レシタシオン』** (1978)

1977年から78年にかけて作曲されたこの作品は、女優であり歌手であるマルティーヌ・ヴィアール (1944~)とのコラボレーションのひとつであった。ケージやシュトックハウゼン、そしてカーゲルも作品を書いているヴィアールの声の技術と特質、そして演技者としての資質を想定して書かれた独唱作品である。

もともとの発想は、ことばの音節と音素を音符や音高のように扱うことであった。それは言語(基本的にはフランス語)を旋律と見なし、そのパラメータとして色彩を含むさまざまな要素(そこには、速度や反復、口調、感情表現、描写性、ことばの産み出すアクション……といったものまで含まれる)を読み込んでいくものである。演奏者(ソロ女声歌手)は、楽譜に書かれている「課題」を、それぞれの声の質や声域(テッショウーラ)、キャラクターに合わせて、自由にヴァージョンを創ることが可能であり、レパートリーにしている歌手はヴィアールを含めて数名いるものの、「歌手」に要求されるものが非常に高度であるために、各人が速度や発話の方法、楽譜の読み方においてかなり異なった作品像を示している。

14曲はそれぞれ短いフランス語(以外も多少含む)のテクストを用いており、それらはミクロな物語性を含んでいるものの、特に方向性はなく、むしろことば遊び的な色彩が強い。よって、フランス語を解しても解さなくても、あまり気にすることはない。むしろ、演奏者のパフォーマンスからテクストの内容を聴き手のひとりひとりが多様に想像し、解釈することの方が重要だろうし面白い。

例えば、第1曲に用いられている短いテクストは12の単語からなる

“tresses femme elle jeune les œil son lève jeune elle la lie” というもので、あえて訳すならば「三つ編み 女性 彼女 若い目 音 上げる 若い 彼女 澱」(樋口鉄平訳を参照)になるだろうが、これらの単語それぞれに異なった12の音が当てはめられて12音列が作られている。そしてこの音列が、順番を入れ替えられ、反復音を含めて音符の数の増減を伴ったさまざまな長さにされ、また装飾音を与えられ、トレモロにされながら、急速にかつ正確に「歌われ」ねばならない。この方法は第5曲から7曲、そして第12曲にも、技術的な性格を変えて用いられている。ベリオの『セクエンツァ』以上に過酷な世界である。

第2曲では多くの短いセクションからなる楽譜片が順次シェプレヒュティンメで「語られて」いくが、上下左右、どちらに向かって読譜していくかは自由である。ただし、同時にふたつの異なる発音の層があり、楽譜の下に書かれたテクストを朗読しながら、同時に楽譜の上に書かれたテクストを唇の動きで「発話」する必要があり、そこには外国映画の吹き替えを見ているような、口と語りの合わない分裂症的な感覚が呼び込まれている。

第3曲では、テクストの音高ではなく、リズムのみが示されているが、その「語り口」が小節ごとに定められており、1小節ごとに「命令口調で」、「嘲笑する」、「とても優雅—社交的な」、「道化師」、「多情な—肉体的な」……といった、急速でめくるめく表情変化を伴いながら語りが行われる。テクストや単語の途中でこの変化を行わねばならない場合も散見される。

もっとも長い第4曲には “Requiem en couleurs (dans l'intimité)” (「色彩のあるレクイエム(親密さのなかで)」)という副題が付されているが、ここでは「受動的」、「冷たい」、「遠い」といった指示を付されたほぼ一定の音程の持続による声に対して、ひとつひとつの持続の途中に非常に具体的だが奇妙な表情が指示されている。「槍投げ」、「水圧ポンプ」、「沸騰する水」といったものだ。それらによって持続が切り裂かれている。ドイツ語の “ich” も多く登場する。

第8曲から第12曲までは、当初の1語から次第に言葉数を増やし、直前のテクストを反復しながら増殖していくテクストを用いて、下方に長く広がっていく三角形の体裁の楽譜によって記譜されている。正確な反復と次々に変化する増殖の両者を、同時に考慮しながらの語りが求められている。第10曲のように、左側に短い音符によるテクスト、右側に持続性のある

音符によるテキストを並べた曲では、初演者のヴィアールは左側だけまず語り、右側はそれとは別途に語っているが、ほかの歌手は「左側→右側」という組み合わせで、短い音符と長い音符という変化を繰り返しながら、次第に長くなっていく下方へと楽譜を読み進む方法を探っている。

第13曲は、12個の音にそれぞれ打楽器の名と、それに見合うオトマトペ的なテキストが付されており、湯浅謙二の擬声語による作品を思い起させよう。

第14曲は一定のリズムでテキストを朗読する。全体は短いものの、一息で語り終わらねばならず、途中で息が足りなくなる。息苦しくなっていく歌手の状況が、舞台ならぬ現実の悲劇のように見えてくる。

[長木誠司]

初演 1982年8月2日 アヴィニョン・フェスティバル(フランス)
マルティーヌ・ヴィアール(ソプラノ)、ミシェル・ロスタン(舞台監督)